

山家 真聞

山家郷塾理念

一、自然の恵みと祖先の恩に感謝し、日々お蔭さまの心を以て郷生の道を歩むこと
一、地域の歴史・文化・伝統を学び考へ今を照らし、故郷の振興と再生を図ること
一、永遠と続く歴史の中にある今を意識し、祖先から受け継いだモノを守り伝えること

試行錯誤

先日NHK大河ドラマ真田丸撮影安全祈願を山家神社にて執行致し、私の所感として自分の住んでいる町を改めて見直すことができる良い契機になったと御礼申し上げます。信繁役の堺雅人様もお見えになり、太鼓の打ち方や祝詞の表現など気さくに声を掛けて下さり、大変嬉しくお勤めの励みとなりました。

真田町は真田氏が守り、そして護られた土地であることは地域の誇りであります。しかし、決して真田氏だけでなく、時代時代にこの真田に命をつないで来た人達がいたことも私たちの誇りです。

今回は真田氏が注目を浴びていますが、そのもつと昔、その後と、地域と人が共に歩んできた歴史の上に私たちは立っています。

その埋もれゆく地域の歴史を伝えていけるものになりたいと思いつつ、文字数の壁が：

迷走中 押森 慎

一隅を照らす



本年八月十四日(金)真田区の夏まつりが何年ぶりに山家神社境内にて行われた。地元の子供たちが書いた絵が『ぼんぼり』となりご先祖さまをお迎えし、一緒に楽しむ庭となった。古来よりの祖先信仰の名残が、小さくも再び産土の社に灯されたこと。踊りをわからないながらもにこやかに踊っていた若者、またそれを支えた年長者。この素晴らしい真田の里の灯火は小さいながらも未来を照らし続けるであろうと感じた。



「公民館役員また自治会の皆さま有難うございます」

真田様ご来訪

平成二十七年九月二十日(日)午前十一時に、真田家十四代当主である真田幸俊様が山家神社に参拝される。事の経緯は大正七年に十二代真田幸治様が成人になられた折参拝し、明治の大火にて失われた森を再生しようと植樹を行った記録が発見された。また山家神社より例大祭の日には真田家へ御神札(おふだ)を贈るのが慣例であったという。

時を経て歴史を掘り起し、数十年振りに真田様が参拝され、境内に松代真田会協賛のもと「榎まき」を植える。松代と真田が再びつながる尊い機会である。当日は奉祝の舞を奉納。社務所にて直会有り。「殿様のお出迎への為真田の皆様お集まり願います」

伝えよ真田神社



明治十七年よりの真田神社創立の書類が見つかった。これが十四代当主の参拝につながった。神社の創立趣意にはこうある。「長村松尾山下ノ真田古城ニ社殿ヲ創立シ永世祭祀シテ以テ其神靈ヲ無窮ニ慰メ其威徳ヲ後世ニ輝サント欲ス」

神社創建にあたり十代真田幸民様との度重なる書簡のやり取り、松代家臣からの真田家由縁の宝物の奉納等の記録が残る。広く大阪からも寄付を募り創立したお宮であるが、それを知っている人はいるのか？現在は遺族会で祭祀を継続しているが、元は長村で祀ったお宮である。歴史的経緯を知り大河真田丸製作局ではこの真田神社の御札をお祀りしていたにしている。真田氏が好きであれば、真田氏が大切にしていたものは何か、また真田家公認の神として祀られたところに参ることが威徳を受け継ぐことになるのではないのか？現代の在り方に疑問を投じる。

お宮とお寺の仲良し小話 習合編

私たちは遠い祖先より生命の根源を支える大地に祈りと感謝を捧げ、先祖の魂はそこに宿り子孫を見守ると：それを根として育ってきた。時に強風による枝折や、根元近くから伐られたこともあったが、それを支える木もあり守ってくれる木も存在した。日本はカミとホトケの国。恵みは太古と変わらずもたらされる。変わるのはただ人の世だけ。

仏教なくして神道なし、先ずは運命の出会いのお話から：

